

パネルディスカッション

「魅力ある世界都市へのプロセスと課題」

》》 パネリスト 《《

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 青山 侑 氏 | 明治大学公共政策大学院 教授 |
| イエスパー・コール 氏 | ウィズダムツリージャパン株式会社 最高経営責任者 |
| 牧野 知弘 氏 | オラガ総研株式会社 代表取締役社長 |
| 吉本 光宏 | ニッセイ基礎研究所 研究理事 |

》》 コーディネーター 《《

- | | |
|--------|---------------------|
| 加藤 えり子 | ニッセイ基礎研究所 不動産運用調査室長 |
|--------|---------------------|

1——はじめに

■加藤 ニッセイ基礎研究所の加藤と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。それではパネルディスカッションに入りたいと思います。このパネルでは、魅力ある世界都市とは何か、そして訪日客4000万人を受け入れるにはどうしたらいいのか、そしてオリンピック・パラリンピックに向けて作りあげたものを2020年以降に向けてどう生かしていくのか、その取り組みについて皆さまのご見解を伺ってまいりたいと思います。

それでは、まずパネリストの皆さまをご紹介いたします。私の隣から、先ほど基調講演をしていただきました明治大学公共政策大学院教授の青山侑先生です。

■青山 青山です。よろしくお願ひします（拍手）。

■加藤 青山先生には、東京都で公共政策に携わられたご経験からお話を伺えればと思います。そのお隣がオラガ総研株式会社代表取締役社長の牧野知弘様です。

■牧野 牧野でございます。今日はどうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

■加藤 牧野様は大手不動産会社やコンサルティング会社に在籍したご経験を生かして、空き家問題や都市問題、インバウンドに関する著作を発表しておられます。本日は2020年に向けて都市がどうあるべきか、幅広い視点からお話しいただければと思います。そのお隣が、ウィズダムツリージャパン株式会社最高経営責任者のイエスパー・コール様です。

■コール Hello、よろしくお願ひします（拍手）。

■加藤 コール様はアメリカ大手投資銀行でチーフストラテジストとしてご活躍されておりました。本日は、日本を拠点とされている外国人として、そして長く日本経済を分析されていた視点からご発言いただければと思っております。そして、向かって右側がニッセイ基礎研究所研究理事の吉本光宏でございます。

■吉本 吉本です。どうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

■加藤 吉本は文化政策に関する調査研究や文化事業のコンサルティングに携わっております。オリンピックにおけるプログラムにも精通しておりますので、都市と文化の視点からコメントいただきたいと思ひます。

それでは早速、パネリストの皆さまから、それぞれのポスト2020に向けての視点からプレゼンテーションをお願ひしたいと思ひます。牧野様、まずお願ひいたします。

2——日本のインバウンド

■牧野 それでは私の方から、「ポスト2020、魅力ある世界都市」について、とりわけ今は日本全国のいろいろな都市に外国の方が増えてきていますので、訪日外国人の方々と私たち日本人、あるいは日本の国がどういうふうに交わっていくのか、これからの日本の発展軸がどういったところにあるのかという点につきまして、簡単にご案内したいと思ひます。

今日は基調講演で、お隣の青山先生から、東京の今後の課題、あるいは魅力をどういうふうに出していくのかといったお話を拝聴いたしましたけれども、私も多くの不動産関係の仕事をしていまして常に感じるのは、都市の魅力あるいは都市の成長というものが、どうやら新陳代謝がきちんとできていることによって

生まれているということです。

つまり多くの人々が訪れたり住まったりする一方で、この都市からまた次の発展のステージを求めて出ていかれる方もいらっしゃいます。入ってくる人がいれば出ていく人もいます。この中で都市の魅力づくりができるのではないかと考えております。しかし、残念ながらわが国は、少子高齢化などと言われますけれども、青山先生の方からもご指摘いただいたとおり、人口の減少ばかりに目が行きがちです。しかし、実は東京の都市圏の中でも激しい高齢化の問題が避けて通れなくなっています。ポスト2020を考える中で、こんな課題があるわけです。

そんな中、この新陳代謝というキーワードについて考えると、私たちが東京の銀座や、ここの品川の通りを歩いているときによく目にする外国の方、お隣のコールさんなどもそうですけれども、こういった方々との連携、あるいは一緒にやっていくパワーが重要です。今日はそのことについて簡単にお話ししたいと思います。

皆さまご案内のとおり、訪日外国人の数は、当初の政府目標を2020年に2000万人としていたものが、昨年は既に1974万人でございます。今年も8月までの累計で既に、約2000万人だった昨年を25%ほど上回り、1600万人を超えてまいりました。こういった中で、政府は2020年の東京オリンピックの年に、訪日外国人を4000万人にしようという意欲的な目標を掲げました。

一方、日本の旅行者数、あるいは国際収支のデータを見ますと、日本から外国に出掛ける出国者の数を、外国から日本にやってくる入国者数（訪日外国人数）が上回るようになってきています。従って、国際旅行収支は、日本人が海外で使うお金に比べて、外国人が日本で使うお金が上回るようになりまして、昨年は久しぶりに1兆円を超える黒字という状況に相成っております。

今は海外のどんな国の方が日本に訪れているかという、皆さまご推察のとおりです。中国をはじめとした東アジア、あるいはタイ、シンガポール、マレーシアといった東南アジア、これらアジアの国々の人たちが訪日外国人の84%を占めています。

彼らの消費動向は、昨年で約3兆5000億円です。この急増ぶりはグラフで見ただくと分かるとおり、2011年の東日本大震災をボトムに5年連続で急速に成長しております。今年は若干、為替の影響であるとか、後ほど出てくるように爆買いが少し収まったことで、消費に対する先行きを懸念する声もありますが、訪日外国人数は冒頭でご案内したとおり、どんどん増えております。そういった意味では、GDP500兆円に対する割合はまだまだ低いものの、訪日外国人の消費の影響というのは、東京のみならず今は日本全国で垣間見られるようになっております。

このうち宿泊の需要はどのくらいあるかといいますと、約4分の1相当の9000億円が宿泊の消費額になります。そういった意味で今後、地方経済あるいは日本経済全体の中で、ホテル業界や観光業界、あるいは小売業界に対する影響は無視できないレベルに成長してきております。

2—1. 量から質へ

今、申し上げましたとおり、外国の方が日本で大量に爆買いするようなことで、メディア等で盛んに話題になったのは昨年です。今年の手百百貨店等の発表によりますと、この爆買いが若干下火になったというお話も聞かれますが、一方で多くの外国人が東京や大阪あるいは京都のみならず、地方に直接周遊に出るようになってきております。

最近、旅行会社の方とお話する機会があったのですが、中国から日本に来られるお客さまの人気のツアーを聞きました。今までは東京の銀座あるいは新宿、秋葉原などに行って、大量にブランド品や化粧品といったものを買っていた方々が、徐々にリピーターが増えてきて、日本のおいしいもの、あるいは良い土産品を求めて地方を周遊するようになってきたそうです。

最近の中国人旅行客の人気ツアーナンバーワンは田植えだそうです。中国にも田んぼがたくさんあるのではないかと私も思うのですが、日本で田んぼに行って田植えをしたいという体験型ツアーが人気なのは、私は仕事で上海などへよく行くのですが、上海は東京に引けも取らぬ大都会だからです。ここで育った若い方や子どもたちは、日本の農村に来て田植えを体験するのが誠に楽しいということで喜々として田んぼに入っています。このように、以前では考えられなかったような観光の仕方が出てきております。

それから、アジアの地区は、皆さま方もあまり想像がつきにくいと思うのですが、富裕層の方が大変増えてきております。こういった富裕層の方々が日本に2度目、3度目の観光をするとなると、しばらく滞在して日本を楽しもうという動きも出てきます。今はどうしても、アジアから来られるお客さまは1~2泊で帰ってしまわれる方が多いのですが、今言ったように、地方に行って田植えをしたり、あるいは日本の秘境に行ってみたいということになれば、宿泊日数もプラス1泊、2泊という感じで、最終的に消費額の増加につながったり、消費内容がより高度化したりする効果が期待できるわけです。

このように、ここ数年で急速にインバウンドが増えてきた日本ですが、世界的に見て日本のインバウンドの数がどのぐらいの位置にあるか、2014年のデータで世界順位を見ると、日本はまだまだインバウンドの後進国であります。2014年現在、外国人訪問者数は世界22番目です。ちなみにトップはフランスの8300万人超であります。アジアでは中国の5500万人、あるいは香港、マレーシア、タイといったところが日本よりも多くの観光客を集めています。

先ほどご案内しましたとおり、日本のインバウンドはアジアからが多く、欧米からは少ないというふうによく言われます。これは地政学的にアメリカやヨーロッパから日本に来づらからではないかと言う方もいらっしゃいますが、そんなことはありません。実はタイなどを調べますと、欧米からたくさんいらっしゃいます。隣にいらっしゃるコールさんがまだまだ普通でない人と思っていると、日本は駄目です。もっと欧米にとって魅力的な国になるためには、日本の観光資源であるとかインフラというものを、今後もっともっと整えてあげることが必要なのではないかと感じています。

今日の基調講演で青山先生からもご指摘いただいたとおり、羽田空港は滑走路が4本なのに鉄道が2本しかないというのは、目からうろこだったのですが、もっと外国人が旅行しやすい整備の仕方もあるのではないのでしょうか。

2-2. インバウンドの受け皿

インバウンドは2020年の東京五輪までではないかとおっしゃる方もいらっしゃいます。これも少し意見が違うのではないかと感じております。なぜなら、今は2000万人の外国人が東京にいらっしゃいますが、まだオリンピックは開かれておりません。さらに、これはJETROのデータなのですが、2020年に向けて中間所得層と呼ばれる教育やサービス、旅行にいそしむ方の人口が、中国では現在の3億人から6億人、ASEANでは1億人から1億8000万人に伸びるだろうと予想されています。

日本はだんだん高齢化してしまっていて、高齢化するとなかなか旅行してくれないという一方、少し目を移す

と私たちの国の外側では、日本に旅行できる方がたくさん増えてきているわけです。

そういった意味では、わが国では今後、MICEといわれるような会議場の施設であるとか、大型の観光施設を伴った大型の施設といったものを、東京あるいは大阪といった所にもっと整備する必要があるのではないかと考えております。

一方、これだけの数のお客さん、2020年で4000万人を受け入れることを考えれば考えるほど、羽田や成田、関空だけでなく地方空港が大きな威力を発揮してきます。実は日本国内に空港は97もございます。

今、この地方空港に外国から直接、飛行機がやってくるような仕掛けをすることによって、4000万人あるいは2030年の6000万人という目標をぜひ達成しようではありませんか。

一方、もう一つの玄関口が港であります。このパネルにありますとおり、大型の客船が日本に続々やってきました。昨年、クルーズ船によって日本にやってきた数は110万人を超えました。政府の目標では2020年に500万人を目指しております。

実は、クルーズ船は大変な威力を持っております。日本が誇る豪華客船の飛鳥IIはわずかに5万t、日本にやってくる最大の客船Queen Mary2はその3倍の15万t、2500人のお客さんが一斉に港に降りてきます。この方々は、1人当たり1回の寄港で3万~4万円をお使いになるそうですので、1回の寄港で何と1億円のお金を港に落とししていきます。現代の宝船といってよいのではないのでしょうか。

私は、こういった方々がこれから日本の地方で旅行されるときに有力な切り札になるのが民泊であろうと思っています。民泊は、都市で行う場合には既存のホテル・旅館との軋轢も多いのですが、逆に今、地方は大型の旅館あるいはホテルが代替わりできず、続々と廃業しています。

そんな中、日本の民家であるとか、空き家になってしまったところをどんどん民泊に利用して、外国の方でも気楽に地方の山奥や海のふちを訪れていただければ、こんな活用の仕方も考えられるのではないかと思います。

一方、日本では外国人留学生の方がますます増えています。

例えば別府の立命館アジア太平洋大学であるとか、秋田の国際教養大といった優秀なアジアの留学生をたくさん輩出している学校が出てきているので、日本で若者が少ないのであれば、どんどん外国から若者に来ていただいて、日本でもっと仕事をしてもらうような作戦も有効かと思っています。

2—3. 陸海空をゲートウェイに

さらに、中国、アジアのみならず、欧米からも富裕層を引き付けられるような超高級リゾートであるとか、日本は水面の多い国ですので、交通機関も例えば水上飛行機などを使って通勤で運んであげるといった発想も求められるわけであります。

日本は今までは大変恵まれた国でした。わが国の人口は戦後どんどん増え、1億人を超えました。そんな中、田中角栄さんではありませんが、新幹線、鉄道、高速道路といったものが日本の発展を支えてきました。

ところが、これからの日本が外国人を迎え入れようとするならば、これに加えて空である空港、海である港のゲートウェイを整備することによって、陸海空の三軍体制でわが国の第2の開国ともいべき外国の方々のゲートウェイを作ってみてはいかがでしょうか。

私が冒頭で申し上げたように、都市の活力は新陳代謝にあるので、陸海空を整備することによって外国

の方が大勢いらっしゃるようになり、日本全体の新陳代謝につながればと思って、私の最初のご提案とさせていただきます。ありがとうございました (拍手)。

■加藤 ありがとうございました。インバウンドのキーワードをさまざまな視点からビジュアルでお伝えいただきました。それではイエスパー・コール様、お願いいたします。

3—Beyond 2020

■コール よろしくお願ひします。コールと申します。私はドイツ人で、実は1985年からずっと日本にいますが、残念ながら日本語は難しいです。もし機会があれば赤ちょうちんに行ってお酒を飲むと、だんだんぺらぺらになるのですが、まだ多分、日本人の特に男性の耳には非常にづらい日本語で、大変恐縮です。

西洋人あるいは外国人の目から見て、なぜ日本のことが好きか、なぜ観光客は増えたのか。政治的なことやビザなどの規制緩和的なこと、あるいは円安や為替の関係など、いろいろ説明はできるのですが、もっと根本的な理由があります。カナダの有名なSF作家のウィリアム・ギブスンが、「未来を見たいのだったら東京へ行け」と言っています。これは非常に面白い言葉で、東京、いわゆる日本には将来に向けた発信力が非常にあるわけです。

今日のテーマは「ポスト2020」なのですが、予測できますか、どうですか。もちろん先生方に、日本人らしくて非常にきれいな都市計画を作っていたことは本当に感謝します。外国人の目からどう見ても、東京はすごい、素晴らしい街です。ニューヨークと比べると、あるいは上海と比べると、あるいは中南米にあるメキシコシティと比べると、東京は最高に住みやすいのですが、未来としては2020年の目標にオリソニックがあるから、インフラ投資をもう一度しっかりやっていたら間違いのないと思います。

3—1. テクノロジーの進歩

でも、少し思い出していただきたいのです。全世界で今、人間の進歩の大変大きな分岐点が起きているのではないですか。これはどういうことかということ、去年、囲碁でコンピューターが勝ったのはご存じのとおりで、人間のエボリューション、いろいろな進歩がありまして、人工知能(AI)やロボットについても、今、抜本的な進歩が進んでいます。今、AIはすごく大きな変化があり、Beyond 2020について考えると、どうしても技術革命を考えないといけないわけです。

「Global Mega Trends」、私はエコノミストなのですが、経済とテクノロジーのどちらが先か、そういう議論は赤ちょうちんで、楽しみにしています。

歴史は繰り返しますが、やはり技術革命のスピードアップはあるのではないかと。明治維新からIndustrial Revolution(技術革命)がありまして、文化改革あるいは富国強兵のキャッチアップが日本にはありました。そして、戦後には日本のものづくり、社会的にはサラリーマン文化、そして政治的には自民党の長期安定政権があったのですが、これも終わりました。

そして今はIT、インターネットのRevolutionが1995年ごろからスタートし、日本に平成デフレをもたらしたと同時に、人間と仕事の関係を根本的に変えました。安定雇用よりアルバイトの方が増え、政治的にも大きく変わったと思います。そしてこれからどうするかということについては、どうもテクノロジー、特にAIの進歩が大きな影響があります。

「Faster (より速くなること)」について考えていただきたいのですが、モバイル通信の速度は現在4Gです。東京五輪が開催される2020年までには5Gになるのですが、そのスピードアップは3万5000倍になってしまうわけです。

社会的な影響もあります。5000万人のユーザーになるまで、どのぐらい時間がかかったかを示すグラフを見ると、ラジオは38年間かかりました。テレビは13年間、iPodは4年間、FacebookやTwitterはさらにスピードアップしています。これによって社会はどうか、人間と人間の関係はどうか。そして、失礼ですが東京五輪のレガシーはショッピングセンターですか。それはある意味、あり得ないことです。

シンギュラリティ、技術的な進歩があると、いつかロボットやAIは本当に人間になるか、あるいは人間はロボットになるか、どちらになるか分からないのですが、このことについて少し考えていただきたいのです。

3—2. 日本のReality

そしてもう一つは、そういう技術的な進歩は、世界のどこでも起こっているのです。中国にも起こる、韓国にも起こる、ドイツにも起こる、アメリカにも起こる。そのときに差別化できるネタは何でしょうか。日本の一番強いところは何でしょうか。それは私の目から見てリアリティです。

私の目から見て、日本はもちろん技術的に非常に強いのですが、日本の強さはAIというより、感情知能、心の知能だと思います。おもてなしという言葉が最近よく使われているのですが、日本の強みは根本的にはものづくりより五感です。見る、聞く、かぐ、味わう、触る、それとたまに第六感の愛や関心なども入ってくるわけですが、やはりそれが東京の素晴らしいところです。

本当に東京は非常に素晴らしくて、五感に対しては何でもあります。よく言われるのですが、東京の高級レストランはパリよりミシュランの星をたくさん持っているのですが、東京の素晴らしいところは、まずい食がほとんどないことです。500円でも安全・安心でおいしいところがあります。だから、Beyond2020について考える場合には、間違いなくAIより感情知能や心の知能について考えていただきたいのです。それが、私の目から見て本当に日本のレガシーです。

技術的に競争力があるのは間違いなく日本です。ロボットやAIにおいて、日本は対国民所得比の技術開発費が世界のトップであり、日本企業は技術開発にたくさん投資しています。だから、やはりAIやロボットには競争力が間違いなくあります。

3—3. 人口減少に対する提案

一方、日本の悪いところは人口減少です。そこで、人口減少について、在日外国人として、一つ提案したいのです。

人口減少がある一方で、インバウンドの観光客は最近増えたと、よく説明していただくのですが、考えていただきたいのは、観光客は消費なのです。もしかしたら戻ってくるかもしれませんが、基本的には1回来てくれると終わりです。しかし、留学生あるいは労働力は、消費より投資なのです。ですから、移民の議論をどうしてもすべきなのです。ポスト2020の一つのレガシーとして、間違いなく移民のことが挙げられます。

どういうことかという、私はドイツ人、あなたたちは日本人です。ドイツ人と日本人はどこが同じかという

と、やはり職人文化です。きちんと仕事をします。今日からすぐに先生になれるわけではなくて、時間がかかります。きちんと真面目に教えてくれる先輩・後輩の関係があって、ご存じのとおりドイツにはマイスター制があります。高校を卒業して、職人の指導を受けながら仕事をし、週末には学校に行きます。そして3~4年後にはライセンスをきちんと取れるというのがマイスター制の根本です。

これは日本の移民政策にどういう関係があるかという点、アジアから労働力が入ってきて、建設業とか、トラックの運転手などに就くときに、きちんとした教育を施す日本型マイスター制が必要だということです。2~3年間、日本の先生、日本の会社で仕事をして、きちんと勉強して、きちんとライセンスを取って自国に戻ったときに、日本からのマイスター制を頂いたところはずごく役に立つことは間違いなくて、インドネシアに戻ってくれば、日本型マイスター制があると銀行がお金を貸してくれることがあるのではないかと思います。

だから労働政策、移民政策については、一方通行ではなく、外から入ってきたときにどうするかということなのです。出口については自国に戻るとききちんとした日本型マイスター制の免許があれば、間違いなく合理的になるのではないかと思います。

私の目から見ると、素晴らしい日本において、どうしても外国の労働力を使わないといけないのは事実なのです。伸びている産業は、ほとんどサービス産業です。日本らしいサービス産業は人間と人間のコミュニケーションなのですが、ロボットやAIはおもてなしサービスは絶対にできません。だから日本の教育でそのような構造をつくっていただければ、ポスト2020の本当のレガシーになるのではないかと思います。すみません、ありがとうございます(拍手)。

■加藤 ありがとうございます。日本人がまだ気付いていないような日本の良さというところもご指摘いただいたかと思います。それでは吉本さん、お願いいたします。

4——アートから東京2020とその先を考える

■吉本 青山先生の基調講演の最後の方にもございましたけれども、私は文化・アートからポスト2020を考えるとということでお話しさせていただきます。

4—1. オリンピックと文化

といいますのは、オリンピック・パラリンピックというのはスポーツだけではなく、実は文化の祭典でもあるからです。

オリンピックの理念を定めたオリンピック憲章の根本原則の第1には、「オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するもの」と明記されています。

そして、近代五輪の祖といわれるクーベルタン男爵は、こんな言葉を残しているのです。「オリンピックとは、スポーツと芸術の結婚である」と。

実際に100年以上前のストックホルム大会から、文化プログラムは行われてきました。当初は五つの芸術分野でメダルを競い合う競技の形で行われていたのですが、それが1952年に芸術展示という形に変わって、1964年の東京大会でも美術や芸能の10分野で、さまざまな展覧会や公演が行われました。

そして1992年のバルセロナ大会以降は、前の大会が終了した年から毎年、文化フェスティバルを開催す

るという4年間の文化プログラムが定着しました。そして、2012年のロンドン大会でかつてない規模の文化プログラムが行われて、大成功を収めたといわれております。

そしてつい先日、終わったばかりのリオ大会なのですけれども、残念ながらリオでは文化プログラムは大変低調でした。それは今日お手元にお配りしたレポートに書いてありますので、ご興味があればお読みいただければと思います。

ですので、2020年の東京大会でどんな文化プログラムが行われるのか、世界が注目しているわけです。

4—2. ロンドン大会の文化プログラムの実績

大成功したロンドンの例をご紹介したいと思います。この英国の地図はガイドブックの最初の方に出ているのですが、一つ目の大きな特徴は、ロンドンだけでなく、イギリス全土で行われたということです。

開催概要は、ご覧のとおりですけれども、4年間で12万件の文化イベントが行われ、4000万人以上が参加しました。そして、下から数行目のところにあるのがすごく重要なポイントだと私は思っています。イギリスの大会ですからイギリスの文化を世界に発信することはもちろん行ったわけです。けれども彼らは、アスリートと同じ204の国と地域からアーティストを招いて、オリンピックというチャンスを世界中のアーティストに提供しました。ですから、わずかに数名しかアスリートの参加しない国からも、彼らはアーティストを招いたわけです。

そして大会の年に行われたフェスティバルでは、「一生に一度きり」というスローガンが掲げられました。一生に一度きりの文化的な体験を提供しよう、アーティストには一生に一度きり、オリンピックがなければできないような作品を作ってもらおうというスローガンです。

具体例を幾つかご紹介します。フェスティバルの事業は、ここにありますように六つの特徴があるといわれています。

これは実際に私が見たものなのですが、ロンドンの繁華街の一つであるストラッドフォードストリートで、パークハウスというショッピングセンターのショーウィンドーを使って写真展が行われました。写真展のタイトルは、「The World in London」というものです。ロンドンは一説によると300以上の言語が話されています。それぐらい世界中から移民を受け入れているのです。ですので、3年かけて、ここでも204の国と地域からロンドンにやってきた移民のポートレートを撮って写真展をしようということが行われました。

3年間かけても、モデルになってくれる移民が見つからない国がありました。小さくて恐縮ですが、スライドの下の方に白抜きの人型のポスターがあります。これはマーシャル諸島 (MHL) からの移民が見つからなかったため、ポスターに何と書いてあるかといいますと、「Are you from Marshall Islands?」と書いてあるわけです。「もしあなたがマーシャル諸島から来た方なら、ここに電話してください。そうしたら、ここにあなたの写真を展示します」と書いてあります。

この写真展はヴィクトリア・パークでも行われて、日本人を探したら、いました。JPNと書かれているのですが、写真の下には小さなQRコードがありまして、それをスマートフォンで読み込みますと、この写真展を企画したフォトグラファーズ・ギャラリーのホームページに行きます。この方はHisako Ikedaさんということがわかり、なぜロンドンに来たかが書かれていて、彼女の声で聞くこともできます。世界中からアスリートがやって来るオリンピックに合わせた優れた企画だったと思います。

パラリンピックに関連して、「UNLIMITED」という障害のあるアーティストによる大規模なフェスティバ

ルが行われました。そのアイコンになったのが、スー・オースティンというアーティストです。

彼女は足が悪いのですが、パフォーマンスをしています。それで、水中でパフォーマンスをするという挑戦をしたわけです。車椅子で水中に潜るのは大変危険なのですが、逆に体重が軽く感じて自由に体を動かさず。そこで特別な車椅子を開発して、このような美しい海で踊って、それを映像作品として残しました。

オリンピックが終わった後、彼女は空中でのパフォーマンスにもチャレンジして、車いすにパラグライダーを付けてパフォーマンスを行っています。そして、彼女の将来の目標は宇宙でパフォーマンスをすることです。もう既にNASAと交渉を始めているというふうに伺いました。

オリンピックのときに、障害のあるアーティストの創造力の可能性が無限大であることを表現し、それをオリンピックが終わった後も追求し続けているというのがスーさんの取り組みです。

次に、ちょっと面白い「Tate Blackout」というイベントをご紹介します。Tateというのはロンドンにある世界最大規模の現代美術館で、発電所を改修したものなのですが、そこでオラファー・エリアソンがLittle Sunというプロジェクトを発表しました。

Tate Blackoutということで、大会中の毎週土曜日の夜10時に美術館のあらゆる照明を消します。そして、これはオラファー・エリアソンが技術者と開発したLittle Sunという太陽電池の照明器具の作品なのですが、これを使って真っ暗な美術館の中をポスターをたどって進むと、真っ暗なギャラリーにたどり着いて、このライトでTateのコレクションを見るという催しでした。

それだけであれば、少し変わった展示ということになるのですが、ここに書いてあるようにLittle Sunは5時間の充電でライトが5時間と持ち、3年の寿命があります。環境にも経済的にも素晴らしいということがうたわれています。

彼は何を考えたかといいますと、ここに16億という数字がありますが、16億とは地球上で電力供給を受けていない人たちの数です。オラファー・エリアソンはロンドン大会でこれを発表して、その16億人の人たちにLittle Sunすなわち「小さな太陽」を届けたいというプロジェクトをスタートさせたわけです。

実際に目標が左側に書かれていまして、2012年に25万人、2013年に50万人、東京大会が行われる2020年には5000万人にこれを届けるという壮大な構想を、彼はロンドンで発表したのです。

そして実際にどのように使われているかが、映像でアップされています。それを見ますと、小さな家で家族がこのライトと一緒に食事をしていたり、子どもがこのランプで勉強したりといった様子を見ることができます。

このプロジェクトは地球環境問題であるとか、経済格差であるとか、そうした社会的な課題にアーティストがアプローチする、チャレンジするという壮大なプロジェクトなのですが、それがロンドン大会で始まったということです。

最後にもう一つ、これは私が大変印象に残っている「HATWALK」というプロジェクトです。ロンドン市内にはたくさんの彫像があります。イギリスの歴史を代表する彫像21体を選んで、帽子をかぶせるというプロジェクトです。

これはトラファルガースクエアにあるネルソン提督の彫刻なのですが、高い円柱の上にあります。何と52mの高さがあります。52mの彫刻にどう帽子をかぶせるか。これは当時のロンドン市長のボリス・ジョンソンの肝いりで行われたのですが、ロンドン市の文化局の皆さんは頭を悩ませました。そして、イギリス国内

に2台だけ、この高さに届くクレーンがあることを発見し、夜中に全部通行止めにして、クレーンでこの帽子をかぶせました。

この帽子のデザインはユニオンジャックとトーチがモチーフになっていますけれども、私が一番しゃれていると思うのは、これをデザインしたのはロック&カンパニーという世界最古の帽子屋さんで、その帽子屋さんは、200年以上前にネルソン提督が実際にかぶった帽子を作ったところだということです。

帽子というのはイギリス王室に代表されるように、イギリスの代表的な文化の一つだと思いますけれども、こういうフューチャリスティックなデザインの帽子もあれば、こんな帽子もあったということです。この帽子は1週間から10日展示された後、また52mのクレーンを担ぎ出して撤去して、一定期間展示されてオークションが行われ、その収入も文化イベントに使われました。

ロンドンの主催した文化プログラムの短い映像があるので、ご覧ください。これはロンドン市庁舎の外壁で、ある日突然行われたダンスパフォーマンスです。こんなことが東京で果たしてできるだろうかと私は思います。

それから、これはビッグダンスという参加型のダンスイベントです。車椅子に乗ったままでも踊れるということで、イギリス全土で行われました。

そして、これがHATWALKの帽子をかぶせるシーンです。52mのクレーンでの設置の様子です。

そして、これは「ピカデリーサーカス・サーカス」といって、1945年の戦勝パレード以来初めて、ピカデリーサーカスを通行止めにして朝から晩までサーカスが行われました。そのフィナーレでは、空中から1.5トンの羽毛が振りまかれ、ロンドン市民は熱狂しました。

日本ではほとんど紹介されませんでした。ロンドン五輪のときにはこんなことが行われていたわけです。

4—3. 2020の先に向けた東京の文化戦略

東京の文化プログラムは、今、関係機関が準備を進めているのですが、2020年を機に、東京はどんな文化戦略を描くべきか、私は五つにまとめてみました。

一つ目に、東京という都市が芸術家の夢が実現する都市になってほしいということです。世界の文化の首都は、これまでパリだったり、ニューヨークだったり、ロンドンだったりしたわけですが、今までにアジアの都市がなったことはありません。文化の首都になるための条件というのは、私はそこから世界をリードする新しいアートが生まれることだと思います。

でも残念ながら東京は、そのインフラや環境が整っていません。国際的に活躍するアーティストは、むしろ東京を離れていってしまいます。ですので、東京から世界にインパクトをもたらすような素晴らしい作品が生み出されるようになって欲しい。これは2011年にイタリアのアーティストが東京の臨海部で行ったパフォーマンスなのですが、こうした作品が次々に生まれるような都市になってほしいと思います。

そして二つ目に、アーティストが集まる都市が実現すれば、アートに限らず新しい価値を生み出す革新的な都市になっていく。東京はそういう都市を目指すべきだと私は思っています。お気付きの方もいると思いますが、これはリオ大会での東京のプレゼンテーションです。青山先生のお話にもありましたが、大変話題になり、高い評価を得ています。私は会場で見えていたのですが、安倍首相が出てきたときは「随分とそっくりさんを連れてきたものだ」と思ったのです。でも何度も「Prime minister ABE」とアナウンスされるものだから、本人がいらっしまったということに気がきました。

先日もモスクワで、ある文化関係の国際会議があったのですが、アムステルダム友人が私に会うなり、「あの東京のプレゼンはすごいよ」と言ってくれました。東京はかっこいいということなのです。そして、「安倍首相がマリオに扮するなんて、あのアイデアは一体誰が考えたのか」と驚嘆していました。「特に安倍首相がマリオに扮して登場したことによって、世界中の何億人もの人が安倍首相の名前と顔を覚えたことは、日本のマーケティングとしてもすごい戦略だった」というのが彼の意見でした。そういうふうクリエイティブで新しいものを生み出す都市というのが、東京のもう一つの戦略としてあってほしいと思います。

そして文化というのは東京だけのことではありません。そのために日本の文化のプラットフォームとして東京が機能してほしいというのが三つ目の戦略です。その文化というのも、伝統的なものから現代的なもの、あるいは芸術文化からB級グルメのような食文化まで、非常に幅広いものがあると思います。そうしたものが全国各地に存在している日本は、世界でもまれな国ではないかと思います。

ですので、そうした文化を東京大会のときに東京から世界中に発信することによって、訪日外国人4000万人を地方都市へのインバウンドにつなげられるのではないかとというのがこのアイデアです。

ご覧いただいているのは東北で行われている三陸国際芸術祭のポスターなのですが、東北には郷土芸能がたくさん受け継がれてきました。それを東京大会の文化プログラムで発信しよう、文化プログラムの開会式を被災地でやろう、と関係者と一緒に現在いろいろ準備を進めております。

そして四つ目は、アートから社会的課題にアプローチする東京であってほしいということです。今、芸術というのは、見るだけで楽しいという存在ではなくて、アートによってさまざまな社会的な課題の解決につながることで世界的に注目されております。例えば芸術を学んだ子どもたちの方が国語や数学の成績が高かったり、リハビリをいくらやっても上がらなかったおばあちゃんの腕が、ダンスアーティストのワークショップで気が付いたら上がっていたり、というようなことが各地から多数報告されています。

ご覧いただいている写真は、東京都がリオ大会で行った「TURN」というアートプロジェクトなのですが、そのときも日本人アーティスト2人が1カ月間、サンパウロの福祉施設に滞在してさまざまなワークショップを行いました。こうした取り組みが常に行われる都市であってほしいというのが4番目の戦略です。

そして最後、五つ目は、市民の創造性が発揮される都市であってほしい、ということです。小さい文字で恐縮ですが、右側にデータが幾つか並んでおります。これは、ロンドン大会の国際会議で都市の文化特性を比較したときの東京データで、海外の方が驚いたものなのですが、東京には一般家庭に何と83万台のピアノがあるそうです。他にもお茶やお花を楽しんでいる人たちは46万人、アマチュアのダンススクールは750件、これは世界ナンバーワンでした。そして540万部の新聞が発行され、そこには毎日たくさんの俳句が投稿されております。

つまり、海外の方が驚いたのは、日本人というのは芸術を鑑賞するだけではなくて、市民そのものの生活の中に芸術やクリエイティブな活動が根付いているということです。それがもっと発揮されるような都市が東京大会を機に実現してほしいと思います。

そして、文化プログラムについてはつい先日、組織委員会が二つのロゴを発表しました。内閣官房でもbeyond2020という枠組みを設けております。東京だけではなく、全国の地方自治体でも文化プログラムに大変興味を持っているところが少なくありません。ですので、2020年のオリンピックではぜひ素晴らしい文化プログラムを実現して、そのことで東京の文化特性を高め、地方の活力創出につなげていけたらと思います。

ます。

どうもありがとうございました (拍手)。

5——魅力ある世界都市とは

■加藤 ありがとうございます。オリンピックと文化プログラムを切り口に文化のさまざまな役割についてお話しいただきました。

それではディスカッションに入ってまいりたいと思います。最初のトピックは、魅力ある世界都市は何だろうということ。青山先生、プレゼンテーションをいろいろお聞きして感じたこととともに、現地調査をいろいろされている中で、こういう都市はここが良いといったことをご説明いただけますでしょうか。

■青山 問題を単純化するために、世界都市を限定すると、東京が互いに比較するときにはロンドンやニューヨークと比較するわけです。それは単純化した場合で、魅力ある都市というのは世界にたくさんあるので、それぞれに魅力があるといってもいいのですが、基本的に成熟社会にある国家の巨大都市というと、東京とロンドンとニューヨークの3都市になると思います。ちなみに、先ほど紹介した2004年のロンドンプランでは、成功した世界都市はその3都市であると言っています。それからニューヨークも、統計的に比較する場合にその三つの巨大都市で比較するわけです。

といっても、そこに異論がある人も多いと思います。実際に東京都がパリの元都市計画局長をお呼びしてシンポジウムをやったときには、私の方でやや挑発して、「ロンドンはこの三つが世界都市だと言っているけれど、私はパリも世界都市だと思う」と言ったら、「いや、それはイギリスの人が言うことなので、私は気にしない」と軽くなされてしまったのです。それから次にロンドンの都市計画局長が来たときに、東京都の主催するシンポジウムで、「パリにそう挑発したら、パリの人はそんなふうに言っていた」と言うと、「パリはロンドンに近過ぎるので、世界都市としては要らないのだ」と言っていました。

その程度のものだと思うのですが、仮に東京とニューヨークとロンドンを比較した場合にどうかというと、まずニューヨークやロンドンと比較した東京という意味での魅力を考えると、一つは東京の場合は工業を持っています。これは先ほど来のお話にも出てきている伝統工芸や手工芸なども含めて、そういうものを持っています。これはやはり東京の特色の一つになっていると思います。

それから、公共交通の利便性や、ニューヨークやロンドンに比べると交通渋滞が絶望的ではないところが良いと思います。それから何といっても治安がいいことと、それと関連して広大なスラム地域を持っていないことも、東京の強みなのかなと思います。それから住宅の価格やホテルの価格は、足りる足りないは別として、広い狭いは別として、少なくともロンドンやニューヨークほどは高くないというのはあると思います。

それから、地域の商店街にそれぞれ特色があることも魅力の一つかと思います。同じようにコンビニがたくさんあったり、個人レストランや個人食堂のようなものが個人商店と並んでたくさんあり、それが多様であるという魅力はあると思います。

一方、ニューヨークやロンドンに比べて、間違いなく世界都市としてもっと頑張らなければいけないと思うこともたくさんあります。まず、金融の力から言うとやはり少し弱いと思います。それから経済活動や金融に対する、あるいは為替取引に関する規制緩和がどれだけあるかということ、これも日本はやや厳しいかと

思います。

それから、お話にありましたように、移民による活力がどれだけあるのかという点でも少し弱いと思います。それは決して移民をもっとどんどん進めていこうという意味ではなくて、議論が難しいのは分かっていますけれども、結果としてそれによる活力はやや乏しいかと思います。

あとは建築物による都市景観という意味で、つまりデザイン性の優れたビルがどれだけあるかという点でも少し劣るかと思います。

さらに言うと、吉本さんの話にあったことに主として関係するのですが、プロスポーツやプロの文化、具体的に言うとコンサートやミュージカル、エンタメ、街角アート、ジャズ、演劇といった文化・芸術を楽しむ心意気はあって、アマチュアのは楽しんでいますが、特にプロのものについてヨーロッパ人やアメリカ人がどれだけ東京にあるものを見に来るかという点、私たちがニューヨークやロンドンにそのために行くのに比べるとやや少ないと思います。

そういった意味で言うと、魅力ある世界都市という加藤さんの問い掛けに対する答えとして、文化と文明と物事を分けるとやはり、文明という点ではかなり東京はいいのだけれども、文化という面ではもう少し頑張ると、もっと魅力が増す面があるのではないかと思います。コールさんのお話の中に進化論がありましたけれど、そういう意味では文化と文明の違いということで、どちらをどう頑張るのかという点は意識して議論した方がいいのではないかと思います。

■加藤 ありがとうございます。なかなか辛口のご批判も頂いたかと思っています。次に吉本さん、文化についてはまだ足りない面が多いのではないかというご指摘でしたけれども、吉本さんの目から見ると文化が際立っている都市はあるのでしょうか。そして青山先生からは今、プロのパフォーマンスを見るという意味での観劇が少ないのではないかというご意見もありましたが、東京に足りないものは何でしょうか。

■吉本 今の青山先生のお話の流れでいきますと、東京ほど世界トップレベルのオーケストラが連日やって来て、世界中の名画や印象派などを鑑賞できる展覧会が開催されている都市は、恐らく他にないのではないかと思います。

でも、それは海外の人を引き付ける魅力にはなっていません。なぜかという点、海外から招聘したものだからです。ですから、都民が文化や芸術を楽しむ環境は、東京は国際的にも抜群だと思いますが、では何が足りないかという点、東京発の東京でしか見られない芸術が生み出されていないことが大きな原因だと私は思うのです。

先ほどロンドンの例を紹介しましたが、ロンドンがオリンピックが終わった翌年、世界で一番訪問者の多い都市になったと伺いました。ロンドン市の副市長の話では、その10人のうち8人は文化を目的にロンドンにやって来るそうです。それほど文化が目的になるということなのですが、同時にロンドンで今何が問題になっているかという点、地価がものすごく高騰してしまって、アーティストのスタジオや住居が非常に厳しい状況になっています。ですので、ロンドンの文化政策では今、アーティストの創造環境をどう整えるのかというのが非常に大きな課題だそうです。

それは東京も同じで、東京で新しい作品が生み出され、そういう活動が活発に行われるためには、そうした芸術を創造する環境や都市のインフラといったものをこれから整えていく必要があります。その大きなチャンスになるのが2020年の文化プログラムではないかと私は思っています。

■加藤 ありがとうございます。それではコールさん、欧米や他のアジアにはない日本の魅力、それから先

ほど青山先生から日本は金融センターとしてはまだまだだというお言葉も頂いたので、それについても伺えますでしょうか。

■コール 金融センターのことは多分何回も、政府の審議会か何かで大体20年前からいろいろ議論されているのですが、これは変な話ですけれど、金融界の人によると、あまり意味がないというのです。どういうことかという、今の金融相場は技術革命で非常に早く変わっているわけです。だから、証券取引所がまだ20年後にあるのかということになるのですが、全部をコンピューターがやってくれるわけです。

だから、金融センターよりも、先生が言ったようにイノベーションセンターです。金融だけではなく、技術やサービス産業あるいはビジネスモデルとしては、イノベーションやアントレプレナー（起業）が重要です。私の目から見ると、金融センターよりも、アントレプレナーセンターやイノベーションセンターという形でやった方がいいと思います。

■加藤 それが日本に合った道だということですか。

■コール そう思います。だから、よく言われるのは、税制改革などはいろいろハードルが高くてできていませんが、これはあまり意味がなくて、根本的に何を指すかということなのです。

そして、日本はアングロ系アメリカやイギリスのような金融相場や金融システムを多分、目指すことができません。だから、これをまずやめていただいて、若い世代に向けてどうやって新しいビジネスモデルをつくり、どうやって新しい開発をし、どうやってテクノロジーと文化を結び付けるかがこれからの大きな課題になるのです。

だから、そういう面から見ていて、金融の狭い話、建設の狭い話、ロボットの狭い話はやめていただいて、本当にアントレプレナーシップやイノベーションについて考えていただきたいのです。

■加藤 ありがとうございます。本当に用意していた質問は、東京の魅力あるスポットということなのですが、そちらも伺っていいですか。

■コール Everywhere（どこでも）。

でも、今は文化と文明の話で、これは非常に難しい哲学的なことがいろいろあるのですが、西洋人の目から見て、なぜ東京に来るのか、何が珍しいかという、歌舞伎を見たいというよりも、渋谷の赤ちょうちんやジャズクラブに行きたいわけです。一方、ロンドンはどこが素晴らしいか、どこに人がたくさん集まっているかという、昔の文化をきちんと口伝で説明してくれるところには誰も行かないわけです。

東京では、歌舞伎や能、生け花、茶道などは日本人の庶民もほとんど分からないことです。でも、逆ににぎやかな新しい文化についてはもっと評価していただきたいのです。

■加藤 ありがとうございます。それでは牧野さん、少し話題が変わりますが、最近の著書では高齢化する首都圏・東京についての問題を指摘されているのですが、魅力ある都市ということで、高齢化に対してどう対応していけばいいかということも含めて、都市について伺えればと思います。

■牧野 今、議論になっているところで一つ大きなポイントがあるような気がしています。つまり、東京という都市がロンドンになろうとか、ニューヨークになろうとかという議論は、あまり生産的ではないと思っています。なぜならば私も若いときにはニューヨークが好きでした。何度行ってもエキサイティングで素晴らしい街だと思っていました。少し年を取ってきたら、ニューヨークのあの緊張感がどこかだんだん疲れてきて、時々ロンドンに行くとロンドンの何とも言えない伝統と歴史に裏打ちされた街並みが好きになりました。

そういった意味では、東京というものを私たちが考えたときに、私も東京がアジアの金融センターになれ

るかという質問に対しては、かなり疑問を感じていますし、コールさんがおっしゃったように、無理に金融センターになる必要はないのではないかと。つまり、ニューヨークやロンドンのような東京に対しては、世界から見たら何の魅力もありません。

地方創生の仕事を今やっていて非常に感じるのは、地方の発展が何だかUNIQLOが来るとか、スターバックスが最後に来たのが鳥取県らしいですが、こういったところで地元の人が喜ぶかどうかという尺度でやっている限り、地方創生はなかなかうまくいきません。鳥取県に行けば鳥取県だからこそ見られるもの、体験できるもの、味わえるものを作り出せることが地方創生の一つのキーワードだと私は思っています。

この東京がこれから高齢化してくるのは間違いない事実ですが、東京から見ればお手本はたくさんあるのです。日本の地方都市は東京よりもはるか先に高齢化してしまっています。この高齢化という事実から逃げるできないのであれば、逆に高齢化をキーワードに、例えば地方の人のみならず外国から来た人が「東京では年寄りが何と元気なのか」と思うような都市づくりも一方であるような気がします。

これは社会のインフラづくりもそうでしょうし、働き方、生活の仕方、文化といったところのソフトウェアの中に高齢者文化をどう育てていくのか、世界的に実験をした都市をいまだかつて聞いたことがありません。

高齢化社会というどうしても、高齢者の施設や介護施設、福祉施設という現実的な問題に目が行きがちなのですが、私がお手伝いをしている高齢者施設のお年寄りはとても元気ですし、100歳でも大学の教壇に立てるような方がいらっしゃる施設をたくさん見てきました。

そうであれば、こうした事実をきちんと受け止めた上で、元気な高齢者がもっと都会に出てきて、若い世代の方々と交流するような東京になってくれると、世界中の人々が東京にやってきて瞠目するような都市になると思っています。

■加藤 ありがとうございます。高齢者も含めて多様な人々が元気に生活していることが魅力の一つかと思えます。先ほどの吉本さんの話に戻るのですが、アーティストが東京で場所を持つと思うと非常に高いというのは、ロンドンなども一緒だというお話がありました。青山先生のプレゼンの中では、ロンドンでもニューヨークでも、低所得者用や移民用のアフォーダブルな家が供給されているというお話がありました。青山先生、こういうアーティストも含めて多様な人を導き入れるために、もう少し住宅の供給方法を考えたらいいのではないかという意見はございますか。

■青山 大いにあると思います。東京には62の区市町村があるのですが、この10年ぐらいの間でも幾つかの自治体はそういったアーティスト村みたいな試みをしていて、いずれも今のところはうまくいっていないのですが、それは方法としてあるのだと思います。いずれにしろ、東京では世帯数に比べて住宅数が13%ぐらい上回っていますので、そういった空き家活用を含めてやっていくことはありだと思います。

そういうものは行政が音頭を取ってできるのか、それとも自然発生的に人が集まるのかという問題もあるのですが、いずれにしろ視野には入れておいた方がいいと思います。

6——訪日客4000万人の受け入れに向けて

■加藤 ありがとうございます。これは今後の動きに期待というところかもしれません。それでは二つ目の

トピックの4000万人訪日客を受け入れるために、どう取り組んでいったらいいのかということに移りたいと思います。

牧野さん、地方で直接受け入れるお話があったのですが、東京と地方の相対的な関係はどうなってくるのでしょうか。

■**牧野** 先ほどもちらっとお話ししましたが、私が地方都市でいろいろお話を伺っていると、何だか東京になろうと考えている地方都市が多いような気がします。そうではなくて、この地方の魅力と東京との違いをもっと明確に打ち出した方がいいような気がしています。

東京は素晴らしい都市である反面、これだけの人口が集まってくると、やや人がだぶついてしまっています。従って、地方は逆に人口減少の問題に直面してしまっていますが、人口が減っていく中でどうすれば人が集まってくるのが課題です。一つは観光客なのですが、コールさんがおっしゃったとおり、観光客は来て帰ってしまうのです。

ところが、私がお手伝いをしている大分県別府市では、先ほどの私のプレゼンでも出てきた立命館アジア太平洋大学という大変立派な学校を誘致されて、ここにアジアの優秀な学生が大量に来ています。この学生たちが卒業して、大分県あるいは別府市で起業したり、ここで働いたりすると、仲間が集まって、この都市ならではの発展が本当はできるはずなのです。

私が「本当は」と申し上げたのは、別府市の長野市長とお話ししたときに、市長の最大の悩みが立命館アジア太平洋大を卒業した学生のうち、1人も別府市で働いてくれない、全員出ていってしまうというのです。せっかくこういう整備をしたのに、別府市内で彼らが活躍できるシステムがまだ整っていないのです。

世界中から「ここは魅力的だ」と思われるようなソフトウェアを含めたものがまだ開発できていません。考え方までは良かったのだけれども、ここから先、大分ならではの、別府ならではのといったことを町づくりの中でやっていかないといけないというのは、私は大変感銘を受けました。

そういった意味では、東京ではない地方でどうやって情報を発信していくのかに懸かっています。それによって人を引き付け、場合によっては東京や大阪から地方都市に面白そうではないかといって移り住むような仕掛けができる都市が、これからも発展していくと思っています。

■**加藤** ありがとうございます。相互にネットワークというか、行き来というか、働きかけるというような、少し深いつながりが必要なのかなと思いました。それでは青山先生、東京の受け入れ体制という意味で、いろいろなインフラが整ってきているのかどうかという点と、東京の観光資源は何なのかということについてお願いいたします。

■**青山** 受け入れ体制について言うと、まず一番問題になるのはホテルだと思います。最近、ホテルを建てる場合の容積率緩和の政策を出していて、具体的な対応はまだこれからですが、オリンピックまでまだ4年近くありますので、効果は相当期待できると思います。

それから意外と盲点なのですが、最近では鉄道駅周辺、神田や湯島など都心近くの地域の今まではマンションを建てていた敷地に、ビジネスホテル風の、それもいろいろ工夫がされているビジネスホテルが結構たくさんできていることに気が付いた方も多いと思います。

私は大体、ニューヨーク市役所やロンドン市役所から人が来ると、割とビジネスホテルに泊めるのですが、初めて泊ってみると案外喜ばれるのです。都心まで歩いて行ける所に1万円台で泊まれて、清潔で安全だということで喜ばれるのですが、これは一つの売りだと思います。

それから、民泊が随分話題になりましたが、民泊からさらにホームステイができるところが日本は非常に少ないです。これからは、今まで大家族が住んでいた広い家に1人住まいというケースもどんどん増えていき、そういう意味ではヨーロッパやアメリカのようにホームステイ先が非常に多くなる状況に日本もこれからなっていくので、これは一つあるのかなと思います。

いずれにしろ、特にビジネスホテルなどは、2020年前後に一気に需要が膨らむのですが、その後の長期的なことを考えると、ある程度リノベーションができるようなことも考えていった方がいいのではないかと思います。

それからもう一つは、観光のための資源についてだったと思うのですが、これは先ほど来いろいろ話も出しましたが、私は牧野さんが言った田植えの話が非常に印象的でした。東京でも実は、稼いでいる農家は結構稼いでいまして、一番稼いでいるのはやはり果実のもぎ取りです。ナシや大粒のブドウなどのもぎ取り観光は非常にお金になります。農家がもうかっていると言っているのではなくて、それなりに現金収入になるということなのですが、実は都市でも農業がかなりうまくいっている農家はうまくいっているという側面があります。

都市計画法では、10年以内に市街化区域内の農地を全て廃止すると宣言したのですが、生産緑地法のおかげもあって、40年たってもまだかなり残っているというのが東京独特なので、これも利用できる面があると思います。

それから東京の場合で言うと、食文化だと思います。ニューヨークなどでは、かつてのすしから今は丼物とよくいわれるのですが、ニューヨークのタイムズスクエアなどで丼の旗がはためいているお店に入ると、日本人は一人もいなくて、皆さん箸で丼を食べている光景を最近によく見掛けるようになりました。先ほど来、話も出ているのですが、日本独特の食文化がかなりあるので、これは観光資源としては特に東京はあるのだと思います。

ただ、その場合に少し理屈を言っておくと、日本人は清潔好きで、食品安全に対して良いイメージをコールさんなどは持っていただいていたが大変ありがたいのですが、同時にこれからはヨーロッパやアメリカで流行していることで言うと、国際認証制度でGAPや何かをどんどん取っていくとか、ハラル認証を取っていくとか、ハラル認証についても議論があって、それをやらなくてもいいという人もいるのですが、やはりそういう多様な対応ができるような形も、オリンピックがあるちょうどいい機会なのでやっていくといいと思います。

■加藤 多様な人々が来日するのに対応していったってインフラを作っていくということでしょうか。そうしましたら、コールさんとしては、さらに外国の方が来るためには何が必要だとお考えですか。

■コール 先ほどイノベーションセンターと言いましたが、これは実はAppleとかGoogleとかではなくて、中小企業なのです。職人の企業なのです。これはレストランのビジネスとか、そういう職人で、やはり日本型のマイスター制を頂ければすぐ役に立つ、すぐレガシーをつくることになるわけです。

そしてもう一つは、外国人あるいは移民のために何かを作るべきという考え方ではなくて、まず日本人のために何をやるべきかということです。これはどういうことかということ、当たり前のことなのですが、人口減少があると、もっと子どもをつくらないといけないわけです。

でも、夫婦関係、家族関係に優しい環境をまずつくらないといけません。だから、ホームヘルパーなどは今、東京で特区の議論が始まったわけですが、これはどうもフィリピンやインドネシアから入ってくる女性が

ほとんどになると思いますが、そのために優しい制度を作るべきだということは、実は日本も思っているわけですね。

私はドイツ人なのですが、留学はアメリカ、仕事はパリでしまして、日本に来ました。外国人に一番優しいところは、日本なのです。フランスはドイツ人に対して大変厳しいのです。役所に行ったら大変です。冗談ではなくて、考えていただきたいのですが、ニューヨークに行っても、パリに行っても、ソウルに行っても、上海に行っても、英語が書いてある看板などはありますか。やはりないわけです。

だから、まず選択としては外国の移民、外国の労働者に対して何をやるべきかということより、まず日本の社会のために何をやるべきかだと思います。移民はファイターだから入ってくると何とかあります。

■加藤 まず日本の社会が輝かないといけないということですか。

■コール そうだと思います。そして、もう一つ具体的なこととして、先生のチャートでちょうど留学が今は大変増えているわけなのですが、これはすごく大事なポイントなのです。

東京に来て、大阪に来て、大学に行って日本語をきちんと勉強して、その後はどうするかということなのですが、本当に日本の会社の社内文化は外から入ってくる人を受け入れているかというのは大きな疑問です。実は、アメリカから来日して日本語を勉強して、大体60~70%は戻ってしまいます。そして日本に無関心ということになってしまいます。なぜかというのは、日本の会社にはほとんど入れないからなのです。

■加藤 入ったとしても扱いが別枠だったりしますものね。

■コール そうです。Bチームです。

■加藤 そのあたりは一体化するような政策がないと入ってきてくれないということですね。吉本さん、4000万人という目標について、どう捉えているかということなのです。

■吉本 4000万人というのは、今日のシンポジウムのサブタイトルになっているのですけれども、4000万人というのは東京の目標ではないと私は考えています。正直なところ、東京はこれ以上混雑してほしくないという個人的に思っていて、この4000万人は日本全体の目標だと思うのです。

それで先ほど地方空港に直接入ってくるという話もありましたけれど、ではどうやって4000万人の観光客に地方都市へ行っていただくかというときに、やはり文化というのが私はすごく重要なキーワードになるのではないかと考えています。

ご覧いただいているのは、これもイギリスで恐縮なのですが、ラフガイドという旅行ガイドブック大手のホームページの日本の「THINGS NOT TO MISS」、つまり日本で見逃してはいけないもので、その1番は京都なのですが、2番がスキー、3番が築地、4番がさっぽろ雪まつり、5番が奈良、そして6番目に直島というのが出ています。

直島をご存じの方はいらっしゃるでしょうか。瀬戸内の小さな島なのですが、今はアートの島として世界的に有名になっているのです。

これは草間彌生さんという日本人のアーティストの直島を代表するシンボルの作品なのですが、今年は瀬戸内国際芸術祭というものが開かれています。今回で3回目なのですが、先日、高松市長に伺ったら、来場者の10%以上が外国人だそうです。3年前の前回はわずか3%だったそうです。

台湾、香港の方が多く伺いましたが、次に多いのはフランスの方らしいのです。フランスの人は東京には文化を見に来ないけれど、直島には行っているというわけです。それぐらい文化の力は地方都市のインバウンドに重要で、それを世界中にアピールするのは、2020年が絶好のチャンスだと思っていて、私は文化

プログラムの一つとして提案しているのがこれなのです。

日本の文化の特徴、文化的に強いものを全国で例えば2000カ所ぐらい選んで、専用のホームページを作って、英語、ドイツ語、フランス語、韓国語、中国語は当たり前ですが、世界中のマイナーな言語にも対応した専用サイトを作ってしまう。一旦作れば2020年以降の更新は簡単ですから、将来的に観光のインフラ、レガシーとなって残り、2020年以降に地方へのインバウンドの実現に寄与するのではないかと思います。

ですので、東京に関して言うと、もちろん観光客に来ていただいて、いろいろお金も使っていただいて、経済的に潤うことは重要だと思うのですが、東京が今考えなければいけないのは、10万人の観光客を誘致するよりも、10人の世界のトップレベルのクリエイターをどうやって引き付けるかということの方が、私は重要ではないかと思っています。

7——ポスト2020の課題と対応策

■加藤 ありがとうございます。インバウンドにもいろいろな形があるというのが、皆さまのコメントから伺えたかと思います。それでは最後のトピックなのですが、ポスト2020の課題とその対応策ということで、少し時間が押していますので、短めのコメントでお願いできればと思うのですが、まずコールさん、既に行きいろいろご発言いただいているのですが、日本の社会構造が変化する中で一番大きい課題というのは何だとお考えで、それは克服できるのでしょうか。

■コール これは大変失礼な発言になるかもしれませんが、二つあります。僕は日本が大好きで、いつも思っているのですが、やはり赤ちょうちんで聞いても、最悪なことは何かというと、まず決断能力です。決めることに非常に時間がかかります。これは何でもそうだと思います。

そしてもう一つは、日本ではやはり縦社会という議論がよくあるのですが、若い人たちがアートのコミュニティをつくる場合に、これは霞が関などの役所、文科省命令でつくるわけではないでしょう。やはり20~30歳の若いアーティストに、どうぞ遊んでつくってくださいという自由さが日本にはないと思います。

■加藤 古い社会ということでしょうかね。これは克服すべきポイントかと思います。それでは吉本さん、成熟した世界都市を目指す上で、オリンピックをきっかけとした文化プログラムの動き等ありましたら教えてください。

■吉本 先ほども少し申し上げましたけれど、いろいろな関係者のご努力で文化プログラムの準備は徐々に始まっています。そして私が今、一番期待しているのは、まだ準備中なので詳細は公表できないのですが、東京都が若いアーティストやクリエイターから斬新なアイデアを公募しようと準備を進めているということです。

ロンドンの例でもおわかりのように、やはり少し破天荒なアイデアが必要ですが失敗するかもしれない、でも成功したらすごく話題になる。そういうことに懸けるといえるか、リスクを取るということだと思うのですが、そういうことができるかどうかというのが東京という都市が世界の芸術やクリエイティブな活動の中心になれるかどうかの境目ではないかと思うのです。

そして、失敗するかもしれないことに、公共のお金を使うことができるかどうか、それはものすごく高いハードルです。でも、オリンピックだから、一生に一度きり、ロンドンはそう言いましたけれども、オリンピック

だからやってみようという実験に懸けるようなチャレンジ精神で素晴らしい文化プログラムを実現できれば、東京の魅力は格段に増します。

それが実現できれば、そういうニュースには世界中のクリエイターは非常に敏感ですから、東京に行くとすごく面白いことができるかもしれないと思うわけです。霞が関の政策ではなくて、そういうことに世界中のアーティストやクリエイターは反応して、自然に集まってきます。ですから、そういう文化プログラムというのを、ぜひ東京で実現してほしいと思います。

■加藤 ありがとうございます。それでは牧野さん、全国でコンサルティングされていると思うのですが、その中で課題と感じていることがありますでしょうか。

■牧野 これは東京の課題でもあり、全国の課題でもあるのですが、私がこれから2020年以降の日本で一番必要だと思うのは、チャレンジすることです。チャレンジというのは、先ほども皆さま方から出ていますが、日本人というのはどうしても良い意味で遠慮深く、非常にポライトな国民であります。裏返して言いますと、チャレンジをだんだんしなくなってきている国民だということを、東京のみならず地方に行っても非常に感じます。

つまり、何となく自分たちだけ良くなれば気持ちいい。この発想に立つ限りは、これからの日本はあまりうまく回らないのではないかと僕は思います。例えば、「東京人」と言ったときに皆さんは何を思うでしょうか。東京の人は何か特徴があるでしょうか。

例えば世界から見て日本人、東京の人はこういう特徴を持っていて楽しくて面白いと思うような国あるいは都市をつくれるようになるといいと思います。別に人口が減ろうが、高齢化になろうが、こうした東京人というものをこれから2020年以降でつけれなければ、オリンピックが単なる宴で終わってしまうのではないかと。

そうではなくて、社会インフラを作ることも大事ですけれども、私たちのハートをわれわれがビビッドに生きることによって、これを見ている世界中の人たちが東京は何か面白いではないかと思うようになり、東京に来て東京人と一緒に居酒屋に行ったり、文化・芸術を楽しんだりする世界になってくれればいいと思っています。

■加藤 レガシーは人に宿るといえることでしょうか。それでは最後に青山先生、多世代の方々が東京に住んで、または来訪して魅力を感じるための課題を聞かせください。

■青山 ちょうど2020年のオリンピック・パラリンピックは、2012年に行われたロンドンと同様に、成熟した国家におけるオリンピックということになります。成熟社会 (mature society) とは何かと言うと、一般的にはすぐ少子高齢化とか、経済の低成長ですとか、人口の減少と言うのですが、同時に物理学者のデニス・ガボールは「Mature societyとは、経済が低成長になっても人々が生活の質の向上を諦めない社会である」と面白いことを言いました。

確かに成熟社会にはそういう側面があるのだと思います。ですから私たちは、この機会にスポーツや文化、観光を私たち自身が遠慮しないで楽しんでいくことで、観光という今日のテーマで言うと、世界の人が「どれどれ」と言って、「日本人は楽しそうに生活している」と言って見に来ます。そういうふうに私たちは遠慮しないで生活を楽しむことが大切だと思います。

■加藤 ありがとうございます。楽しんでいこう、というのも課題ということですね。

それでは、そろそろ終わりが近づいてまいりました。オリンピック開催までにはまださまざまなハードル

があって、苦難の道があるというのが日々の報道からもうかがい知れるわけですが、本日の皆さんのコメントから、これが一過性のイベントではないことを実感いたしましたし、外国からいらっしゃる方も、働く方も、住んでいる方も、継続して生き生きできる魅力的な世界都市になるヒントを頂けたように思います。

それでは、これでパネルを終了したいと思います。皆さま、どうもありがとうございました（拍手）。